

医学部への再入学

私は高校時代に始めたラグビーから多くを学んだ。ラグビーはその後の生き方や考え方に大きな影響を与えてくれた。「人生のやりがい」を真剣に考えるようになったのもそのひとつだ。

プレーのおもしろさだけでなく、ラグビー精神、自己犠牲の精神などラグビーの魅力に取りつかれた。ラグビーに「やりがい」を感じていたので、厳しい練習や夏の合宿にも耐えることができた。「人間はやりがいを持ってやっていたら、たとえ大変なことや嫌なことがあっても耐えられる」こともラグビーから学んだ。

大学は最初工学部へ入り、大学院在学中に就職活動をしていたが、大企業の歯車のひとつになることがやりがいであるとは感じられなかった。その頃、重症心身障児医療に人生を捧げていた

名古屋第二赤十字病院名誉院長
石川清
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 1



筆者近影

長兄の姿を見て感動し、医学部へ入り直す決意をした。

医師になってからは、集中医療がやりたくて麻酔科を専攻し、生きるか死ぬかという患者さんを救命し、患者さんや家族からの感謝の言葉に大きなやりがいを感じた。

日赤では災害医療にも関わり、阪神淡路大震災での救援活動で被災者から

涙を流して感謝された経験は大きなやりがいとなった。

その後、東日本大震災や紛争地のスーダン、地震や津波に襲われたスマトラ島やイランでの救援活動に関わったのも阪神淡路大震災の経験があったからだ。

院長になってからは「職員のやりがい」を見出すことをやりがいとして、

人生の「やりがい」求めて

病院経営に専念した。

2018（平成30）年3月、定年退職を迎えるに当たって、第二の人生としてまず考えたのは、やはりやりがいのある仕事だった。

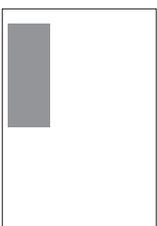
そんな時、お話をいただいたのが学校法人佐愛学園の丹羽治一理事長だった。

同学園はリハビリを学ぶ短期大学で

いしかわ・きよし 名古屋大学工学部航空学科・同大学医学部卒業。1978（昭和53）年、名古屋市立大学病院麻酔科に入局。トロント大学留学を経て助教授。94（平成6）年、名古屋第二赤十字病院麻酔科・集中治療部長。阪神淡路大震災救援、スーダン紛争被災者救援などを経験。2007（平成19）年、院長就任。定年退職後、愛知医療学院短期大学学長。73歳。名古屋市出身。

クリニック・デイケアセンターとこども園を併設していた。

高齢化が進む中、リハビリの人財育成は不可欠であり、加えて、学園の三つの組織が三位一体となって、学生、子ども、お年寄りの3世代が交流する世界を創り、「地域のお年寄りを元気にする」というビジョンを達成することとは、やりがいのある仕事と思い、学長を引き受けることにした。



柳橋界隈の思い出

私は1947（昭和22年）年12月、男3人、女1人の末っ子として生まれた。父は三重県多度、母は愛知県蒲郡の出身だが、私が生まれた時には名駅に近い柳橋で薬局を営んでいた。

昭和22年は終戦から2年目で、私は人口のもっとも多いベビーブーマー世代に属する。兄や姉は疎開先の田舎で生まれ、私だけが生まれも育ちも名古屋ということになる。

幼少期の記憶をたどってみると、見えてくるのは当時の柳橋界隈（かいわい）の風景だ。両親の営む薬局の前の江川線には市電が走り、通りを挟んだ正面には白龍神社があった。

名駅前には幼い頃からよく出かけていき、地下街は生活圏であり遊び場で

名古屋第二赤十字病院名誉院長
石川清
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 2



4人きょうだいの末っ子

もあったので、どの出口を出るとどこへ行くか、すべて熟知していた。柳橋中央市場も近いので、母に連れられ

名駅前には映画館があつて兄と一緒

もあつたので、懐かしさから「笛吹童子」を購入してみた。今の大人の目からすれば他愛もないストーリーだが、子どもの頃の恐怖の記憶は今も鮮明に残っている。

によく映画を見に行った。今でも鮮明に覚えているのは「笛吹童子」だ。

子どもが4人ということもあって、家庭は裕福ではなく、両親は子どもに厳しかった。教育に関しては、兄弟

当時はまだテレビが普及しておらず、娯楽と言えばラジオと映画の時代だった。ラジオドラマの人気も高く、子どもたちに人気の高かったひとつがNHKの新諸国物語「笛吹童子」で、これが映画化されたのだ。

の誰も私立の学校に行くことは念頭になく、滑り止めの受験さえもなかった。

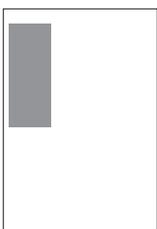
戦国乱世の武士の兄弟の物語だが、兄の顔に被せられたしゃれこうべの面が、妖術で取れなくなるシーンが怖くて、忘れることができなかった。

兄たちと私は大学まで進学したが、
“女は大学に行かなくてもいい”という親の考えで、姉は優秀であったにもかかわらず、高校を卒業すると職業訓練学校へ通い、やがて結婚した。

最近古い映画がDVD化されている

姉は時折、その頃の無念な思いを口にするがあるが、根底にはやはり経済的な問題があつたのだろう。

男3人、女1人の兄弟の末っ子の私
(前列右が筆者)



伊勢湾台風

小学校は地元の六反小学校に通っていたが、6年間で最も印象に残っている出来事は伊勢湾台風だ。私が5年生の時だった。

1959(昭和34)年9月26日夕刻、紀伊半島に上陸した台風15号は、愛知・三重の伊勢湾沿岸地域を中心に、死者・行方不明者が5千人を超える甚大な被害をもたらした。

両親が営む薬局の店舗は江川線の広い通りに面していたので、強風と雨がもろに店のガラス戸の外の雨戸に打ちつけてきた。家族全員で風にたわむガラス戸を内側から必死に抑えていた。夜が更けるにつれて風雨は恐ろしいまでに激しさを増し、ついに雨戸が吹き飛ばされ、ガラス戸は粉々に割れて、

長学名譽院
大短期病
十字院名
赤十字病
第二赤十字
屋第二赤十字
古知医療学
名愛知

石川 清³



風雨が店の中に一気に吹き込んできた。家族全員、裏の扉から隣家に避難したが、その時、半ズボンから出ている

ひざ下のあたりが生温かくぬるぬるとしているのに気がついた。割れて飛び散ったガラスでひざ下の所が大きく切り裂かれていた。

幼少期の体験が救援活動へ

それは不思議な感覚だった。

切り傷は10センチくらいあり、骨まで露出しているのに、恐怖のせいかな、なぜかまったく痛くはなかった。

本来であれば、すぐに病院へ行って縫わなければならないほどの傷であったが、台風の最中では応急の止血処置しかできなかった。

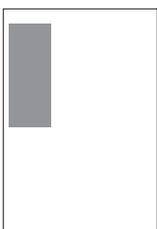
災害医療の原則として、大規模災害時には、傷は縫合せず止

血のみ」という言葉があるが、災害医療の原則を実体験した形になった。その時の傷跡は今も残っており、その傷を見るたびに伊勢湾台風を思い出す。

翌朝、台風が去っても水は引かず、店の前の通りは川になっていた。私は包帯を巻いた足で、両親と一緒に流された商品を拾い集めていた。

今まで阪神淡路大震災や東日本大震災の救援活動で悲惨な現場を見てきた。人が何千人も亡くなる大災害は、長い人生の中でそう何回も遭遇するものではないが、私は伊勢湾台風を含めれば3回も体験したことになる。

こうした国内の災害救援だけでなく、国際的な救援活動にも自発的に参加してきたが、伊勢湾台風という幼少期の実体験がそうさせたのかもしれない。



笹島中学校

小学校へ通っていた頃の私は、人前では話ができない恥かしがりやで、とりわけ低学年の頃は、友達はいたが、あまり話をしない無口な子どもだった。そんな私に6年生の時、担任の先生が「生徒会の書記に立候補するように」と無理難題を押し付けてきた。断る勇氣もなく、出ることになった。

書記は選挙で選ばれるので、立会演説会で自分の意見を述べなければならぬ。私は話す内容を暗記して準備万端で臨んだ。しかし、途中で内容を忘れてしまい、しばらく無言のまま頭をかいて、皆に大笑いをされた苦しい出が残っている。

そんな私だったが、足は速く、陸上の学校代表の選手として選ばれたこと

長谷川 裕子 院長
名古屋第二赤十字病院名誉院長
愛知医療学院短期大学学長

石川 清 4



は自慢できることだ。

1960（昭和35）年3月に六反小

学校を卒業し、4月からは地元の笹島中学校に通うことになった。

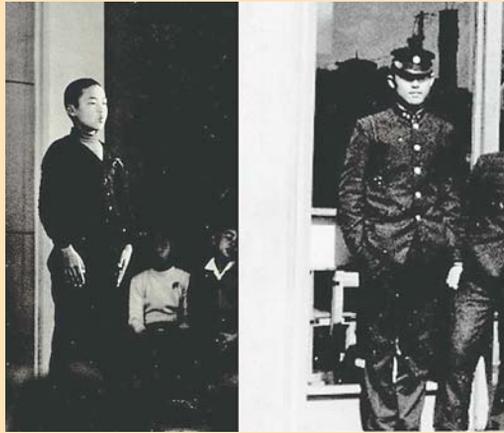
若い女の先生を泣かせたりするようなこともあった。

生きていく術を学ぶ

自宅も学校も名駅に近くて便利だったが、環境は決して良くはなかった。近くには笹島の職業安定所があり、治安が悪くて市内でも問題の地区だった。

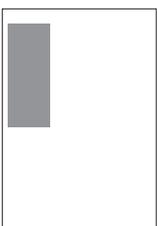
私は成績が良かったのと運動もできたので、いじめられたことは一度もなく、生き抜いていく術をおのずと身につけることができた。

小学校の立会演説（左）と、粹がっていた中学生時代（右）の筆者



この地区は笹島学区に入っていたので、笹島中学は問題校のひとつでもあった。六反小学校の卒業生のかかりの生徒が笹島中学には行かず、私立やほかの地域の中学に移動していった。

今では、六反小学校は神明小学校と統合されて笹島小学校となり、笹島中学に併設されて小中一貫教育がなされており、模範的な学校になっている。隔世の感を禁じ得ない。



文武両道、旭丘高校

1963（昭和38）年3月、私は笹島中学を卒業して愛知県立旭丘高校へ入学した。笹島中学からは私を含めて3人が入学した。

旭丘高校に入学して驚いたのは、クラスの中には本当に優秀で、頭の良い生徒がたくさんいたことだった。

高校時代の私にとってもっとも重要な出来事は、兄の影響を受けてラグビーを始めたことだった。兄は西陵高校でラグビーをやっていた。西陵のラグビー部は全国大会に出場する強豪であり、兄は家へボールを持ち帰ってきたりしていたので、私もおのずと興味を持つようになった。

旭丘高校のラグビー部も伝統があり、県大会でも優秀な成績を収めている。

長学 院長 名譽 院学 名譽 院学 名譽 院学 名譽 院学
赤十字 短期 大 学 学 学 学
第二 医 療 学 院 短 期 大 学 学 学
屋 知 医 療 学 院 短 期 大 学 学 学
古 屋 知 医 療 学 院 短 期 大 学 学 学
名 古 屋 知 医 療 学 院 短 期 大 学 学 学

石川 清 5



激しい練習に耐えて最後まで残った同期生（後列右端が筆者）

たので、当然のことながら練習は厳しく、とりわけ夏の合宿は死ぬ思いだった。「夏の合宿を乗り越えられれば、厳しい練習が終わった後に飲んだ水

ラグビーから学んだもの

のおいしさと快感は、何ものにも例えようがないものだった。今でも夏の暑い日に運動をした後には、その時の感覚がよみがえる時がある。

同年年の部員は、1年生の時には30人以上いたが、厳しさに耐えられなくてやめていき、最後まで残ったのは半分以下の15人だった。

私が続けられたのは、ラグビー精神や自己犠牲の精神というラグビーの魅力に取り付かれたからで、ラグビーをやっていることが誇りであり、やりがいであった。ラグビー以外のスポーツ

は考えられなかった。

旭丘高校は文武両道の高校で、クラブ活動と勉強の両立が当たり前の校風だった。ラグビー部の先輩の中には、ラグビーも勉強もできる優秀な先輩がたくさんいた。

私もラグビーと勉強を両立するため、練習で疲れて帰ってきて、夕食を終えたとすぐに寝て、朝早く起きて勉強する、というのが習慣となった。

高校時代に培われたこの「朝型」と「運動をする」という習慣はその後も続き、現在は早寝早起きの規則正しい生活習慣と、運動習慣としての早朝テニスを継続している。

今の私の信念である「規則正しい生活習慣・運動習慣と人生のやりがい」「健康長寿の秘訣」は、ラグビーから学んだものだ。

